

祭礼の古い淵源を知る事が出来る。

禪は武士の倫理と似通つた一面ともつたかには、臨濟宗は鎌倉幕府の保護の下に、曹洞宗は地方武士の信仰のもとに発展した。旧仏教寺院で禪宗に転宗したり、禪寺に乘取られたりしたことが指摘されてゐるが、大分県地方史三八一四の号に、禪宗の地方発展に尽した末嗣武士の比重は相当に高いとされてゐる。宗派をえ判らぬ佐田市の服や古市の今は無き古き寺々。郷土史の探るべきところは余りに多い。

宗教、信仰以外に生活慣習、言語、風俗などの生活文化も、もろ／＼の文化も西遷して在来文化と交流していつたてある。今日我々の見る事々出来る石造遺物の多くは、鎌倉期以降のものである。名も無く暮らした多くの五輪塔、供養塔は、ここ大神氏の天地に、新しい文化を伝えた坂東武者の眠る姿であるか。

(佐田 南海部郡跡末所江良)

研究

惟治、春好の魔法について

会員 佐 脇 貫 一

惟治、山上寺の住僧春好を師匠にて、魔法を行はるべき契約有て、上十五日は清淨潔斎の身となり、魔法に他念なく心を入らる。法のしるし神変奇特ありて、打ては響き、呼ば答ふ。身に随ふ影も如し、何事も心に叶はずと云事なし、累代相伝の家老、此儀を更に悦ばず、魔法の恐れを嫌き、唯尋常の御信心計こそ然るべく候へと、幾度も諫申すに一度、御承

引もなく、日に益し月に重り、魔法に心を入らるるこそ末おそしけれ。(大友時盛記)

大魔法は能修得時日幸自由を儲け、衆に修むせむ時は高き求むる力なり。ある時惟治禪て、法に即近穢れたる仔細あり、其上は措肉を食すべき由宣ふ。春好申さるるは、是はためしなき仰か有、髪を剃り衣を帯せしより以来持戒し、潔斎の身にて御座候、今更破戒せんこと御有免服へ。其上数年相伝中假法も、徒に罷成候はんと再三申さるるにも、惟治同せられず、刀をぬき咽喉に差立て食すべきと攻て殺されず。春好亦永家中の僧なれば叶はず、さらば御意に随ひ肉食せんと、左之極之と思ひ鹿へしし、肉を食す。撃てかたもつべき、即座に吐血してけり。衆へ後に深田八郎兵衛尉を討手に給はり、春好を生害せらる。(大友時盛記)

寔に山上寺の住僧春好と云ふ行徳、外法を兼備し、衆に空を翔る鳥も落し、野に走る獸を呼逐す通力自在の法印、是聞くと怪をなす。いかなる因縁にや、惟治公聞及ばれば使者を遣し、何となく帰俗せらるるこそうたてけれ。(柳筆礼実録)

新殿を作り立て、春好は与へけれは、威光日増に又十倍し、益々積徳し、自(明)十日清淨の水と没し、潔斎の精進ある時もあり。黒月七八食を断ち、又は火の穢を忌む(守戒)されば春好が體上修法、惟治公へ外見たるものなし。然るに殿中の度塵とはく下郎の首、或時、板の罅穴より壇上の次第を透見しけるに、本尊は其色赤き事燃る火の如し。形体は

手足数多有て百足ひゃくあしの如し。備への供は粒の黒米を以て合飯うづ高盛て、四方に数々並べ置き、立花と卯月、燈明は宮守の油をつぎ、数百の器物を並べ、春好、惟治公諸共、赤黒取交ぜたる珠子(手珠)を逆手におしめ、礼拝数知れず。
(梅牟礼実録)

或時、竜護寺川原水戸の願に、百騎籠等も並居たり、山上寺より惟治ふりきけ見給ひて、多田七郎兵衛尉に近付き、其の鷲取て来れと仰せらる。七郎兵衛、某は予の手無調法に御座候、余人に仰付られ可然由と宣ふ。惟治聞て、弓と射にはあらず、惟治が便とて抱て取て来るべし。七郎兵衛與さめて、川原に向ひに行き、湖邊なる鷲に向て惟治の便とのべしかば、鷲羽をのべて去る事を知らず、抱き取て帰り壇上に備ふ。
(大友興盛記)

つらつらと春好が常に勤むる修業術を見るに、順逆二つの峯に入り、金剛蔵王の嚴格に、暗金護摩と修する山伏の業にも非らず。禪定工夫の法窟に住する勤にも非ず。成家の道に違ひ、風俗をとろかし、神変奇妙を見せ、袈裟に裳し、或時梵論し、虚無僧褊褌の形と合掌数拜して行と見れば、威綱の三節、不二の及郎の術を修す。或は輪袈裟に衣衣の下長き脚布をさびすに踏んで、口に誦經を唱へながら、手足付て立ち、五体に汗をそそぎ、左め息をさつき、木尊を睥んで一丈の幣串に飛び上り、鐵横に壁を歩及、語に曰く、時有て膝零すれば万物の靈なりと、高声を數百遍呼り、さながら乱心放言の如し。
(梅牟礼実録)

以上は佐伯惟治が僧春好を師として修したという魔法と、春好謀殺の記述を大友興盛記及び梅牟礼実録から採りたものである。市内鶴岡地区脇の山頂、山上寺跡と伝えられる遺跡に残っている春好の墓という墓塔には、『春江陽公座元、□□沙門、大永六年八月』と刻まれている文字が見える。この墓塔が果して伝説の僧春好の墓であるならば、春好(春江陽公)は座元の称号をもちつた僧僧であり、春好の修し方外法は禪家の教を逸脱し左呪術で、彼は惟治の野心に利用され犠牲者であったということが出来る。

六年丙戌豊後國梅牟礼(梅)城主佐伯惟治叛大友、密通菊池義國、与星野親忠約、三家同時、討入於豊府矣。菊池肥後守義國、起于肥後。星野筑後守親忠於筑後。佐伯古京亮惟治發于豊後。謀与攻入於府内、已露焉。大友屋形使白杵近江守長景、佐伯式部大夫惟常追討佐伯惟治、其師一乃也。
(鑑西要略)

これに惟治謀叛の次第を述べた鑑西要略の記述で、右の同書成立の形態からいえば大友興盛記等から引用した記事が多いと思われ、惟治、惟常両者の伝承が混同されているが、惟治が菊池義國(菊池十郎重治)また義武という。幼名は菊池師丸、大友義鑑の弟で、永正十七年また六七年ころ菊池の重臣赤星、合志らの一族に迎えられて菊池氏を嗣いだ。星野親忠らと密約して、大友氏に対して叛きはかろうとしたの事実に近いと見てよい。そしてこの密約が出来たのは大永六年丙戌、春好と春江陽公の歿年は大永六年八月、そこには伝説の裏付けになる何らかの事件があったようである。
下刻上の思想が行きわたった戦国時代、かつて豊後の

統率者であつた緒方三郎惟宗の後裔をもつて任ずる法伯
 惟治が、有能な人物であればあるほど大友氏の下風に立
 つことを快しとほしなかつたであらう。大永六年当時、
 大友屋形義鑑は年齒おがかに十五歳、惟治は三十一、二歳
 の壯年である。彼は幼少(八九歳)の千代鶴を自分の代理
 として齊内に遣り、自らは大友氏覆滅の工作をしたので
 であるまいか。

とまれ惟治には大友氏に取つて代りたいという野心が
 あつた。そのため山上寺の僧春好が外法呪術に通じると
 聞くと、さつそくこれを召出して修法を行かせ、自らも
 魔法を修得すると称して、あわよくば愛宕、飯綱の法を
 得て、その野心を成就したいと考へた。

この戦国争乱の時代は、実力、即ち武力がものをいう
 時代であつたが、若しおのれの武力にプラスアルファ
 する魔力があるならば、野心はたちどころになしとげる
 ことができる。一城の主も、一介の武人もこうした考へ
 方をもちつていた。室町幕府の管領細川勝元の嫡子政元は、
 管領の権威を持統するため魔法に心酔した。彼はその老
 職である三好氏や薬師寺、香西氏などの圧迫にたえきれ
 なかつた。政元は愛宕神を信仰し、自ら愛宕の法を修し
 て、斎戒沐浴、房室(女入)を絶つて魔法の成就を祈り、
 実権を握る三好、薬師寺の党に対抗しようとしたが、妖
 法に魅せられた政元は離反した侍臣の刃に倒れた。

細川政元は惟治と同時代の人物である。また愛宕の法
 を得て仙人になつたという安芸の宮戸家俊もこの時代の
 人である。

そこで問題のは惟治が修得したという魔法の正体は何で
 あるかといふことであるが、前掲の柳牟礼実録によると
 『順逆二つの峯に入り、金剛蔵王の巖窟に、胎金護摩を
 修する山伏の業』つまり修験者の業ではなく、『群定工

夫の法窟に住するは禪家の法でもなく、或家の道に違
 ひ。一般家庭のあり方とも違ひ、何れも不可思議な術を
 使い、僧衣を着ているのに、虚無僧の風をして威綱の三
 郎ゆふに太郎の術を修行する。またあるときは輪袈裟
 に色衣をつけ、脚布(巾もじ、腰巻き)をたらし、かか
 とでふみにじつて、口に呪文をとをえ、四つん這いに立
 つて、身体中汗じへくり、はきは吐息をつきながら本
 尊をなら及つけ、一丈ほどもある御幣にとびついたり、
 壁、天井を縦横にはいまわり、一時有て膝(膝栗か)を
 すれば、万物の霊長なりと高声に数百遍叫び、まるで
 狂人のようである、と記述されてある。

春好の法といふのは金剛蔵王(蔵王菩薩)を祈る修験
 の法ではなく、また群定(仏法)でもなく、何ともいへない
 不思議な術で、威綱(飯綱)不二(仙道)の天狗どもか
 修業する術である。この時代といふより昔は天狗の存在
 が信ぜられる。鞍馬山の僧正坊、愛宕山の太郎坊、比叡山
 の次郎坊、飯綱山の三郎、大山の伯耆坊、彦山の豊前坊
 白峯の相模坊、大峯の前鬼と七天狗とよんだ。さて春好
 の法は飯綱の三郎、不二の太郎(愛宕の太郎坊)の法、
 つまり飯綱の法、愛宕の法と称せられた呪法で、細川政
 元が信じたという魔法と同じものである。

飯綱とは信濃國の北境水内郡飯綱山の頂にある飯綱明
 神のことだ、これは神仏習合の神、印度の陀吉尼(とぎに)と記
 している。御神体は小天狗が狐に跨つていふ像といわれ、
 陀吉尼天と狐神としてその靈を使ひ妖術を行う。これを
 飯綱使といひ、また狐つかいといふ。

柳牟礼実録によると、春好の祭つた本尊は『其色赤き
 手燃ゆる火の如し、形体は手足数多ありて百足の如し』
 と書いてある。大言海の記によると茶吉尼天(たきにてん)
 陀吉尼天、吒呌尼天は飲血鬼(ウアンパイヤ)の意で、天

竺(印度)の女鬼(夜叉)、赤黒色で餓鬼の形状をして
 いる。仏教辭典には「茶吉尼は夜叉鬼の一種にして自在
 の通力を有し、六月前に人の死を知り、其の人の心臓を
 取てこれを食とす。其法を修する者をして通力を得しむ」と
 あり、形体は六臂という。

茶吉尼法は真言密教の法で、愛宕聖とよばれた僧止真
 濟が行じたものという。真濟は愛宕山に籠ること十二年、
 その靈は愛宕の太郎坊となつた。「茶吉尼は通力自在の
 夜叉神なれば、此法を修すれば其人亦通力を得るといふ。
 故に印度の外道、吾朝の真言密教にては茶吉尼法と云ひ
 て盛んにこれを修ふ。」
 『経文に白辰狐王菩薩として身
 に因りて狐神とし、稻荷とす。或はいふ大黒神に属する
 女鬼なりと。俗に野干(やかん)とし、稻荷に祭り、福を
 求め、幸を祈る。』
 『以新呂譜茶吉尼、而河責之。猶汝常
 敬之。故我今当食汝。』(七日經疏)『茶吉尼、此は狐
 と云ふ。曼荼羅の中で夜叉と云ふものなり。業道自在
 にして、速疾身を自由にせり、我朝の飯綱の神と云ふと
 同類なるべし。』(真俗仏事編)

茶吉尼、呪祝尼の法は古来(平安朝時代)から呪術、
 魔法として真言密教の秘法であつた。惟治は春好がこの
 法に通じていることを知り、これを利用して大友屋形を
 調伏すると共に、法の不可思議を強調して人心の收攬と
 ほかつた。しかし菊池、星野との連繫もなり、謀叛の計
 画もほぼ進んだ。特点においては、春好の存在が邪魔にな
 つてきた。惟治が春好の行状に徹れありとしてこれを誅
 し左の如く、恐らく謀叛の發覚をそそげ左方全の措置であ
 つたの左の如く。

私は大友興盛説や榊宗礼実録に記録されている春好伝
 説の史実性と疑うものではないが、春好の名前が大友興
 盛記巻八「藤好と誅せらるる事」に録されている神人懸

好(秋好)に違ひるものがあるので、この伝承に一抹の
 興味を感じている。藤好は毛利元就の聞者(スパイ)で、
 佐領朝臣上陸、その地の巫子春日神子にとりいつて巫子
 と同棲し暗躍していたが、白袴雙連(長景の子)に襲破さ
 れ、捕えられて殺された。ところが藤好の靈は荒入禰
 と有つて地方の人氏を悩ましたので、春日神子はこれを
 『あきよし禰』として祀つたが、後佐賀藩から佐伯宮の
 内(西上町)に移り住み、同地に『あきよしの宮』を建て
 たと伝えている。春好は密教呪法を修する僧であり、藤
 好(秋好)は巫子によつて信奉された怨霊神であるが、
 物語の構成に相似点があるのは注目してよい。

なか権力者き調伏したり、謀反を企てる者が茶吉尼の
 法と修したの古来から胡々あることで、平家物語の陸
 谷の事に「鴨の上の社の御空殿の御後なる杉方洞に壇
 を立て、或聖をこめて呪殺爾へたきに茶吉尼」の法を百日
 行はせられける」とあり、茶吉尼法と飯綱の關係は「い
 ては註解に「狐精を以て具の本体となり、伏見の稻荷山
 に之を祭るより稻荷権現と称し、信濃の飯綱に祀るより
 飯綱権現と名付け、此法を修する者を飯綱使といふ」と
 ある。

春好の魔法は飯綱の法(茶吉尼法)であるが、飯綱使の
 (狐使)は四国、九州地方にある大神使(犬の首を使う呪
 術)と同類のものといわれている。

最後に井筒に現われている雑語の二三を私解しておく。
 赤(粟米(穰)はこれの米(玄米) 金剛蔵王(蔵王菩薩)
 藤好(玄盛、神仏の深遠なる照鏡) 成家の道(一般人の凡俗)
 梵諭(菩薩、梵論師、何んじ虚無僧のこと) 福珍(上半身を捲く法衣)
 藤(呪文の場合は陀羅尼(真言))
 藤(藤の皮、藤は深か、深定はおちおちする)
 不二の太郎(富士山に住む天狗、愛宕の太郎坊ともいう)